博雅文库
BOYA WENKU

日语教学与日本研究

——中国日语教学研究会江苏分会2017-2018年合刊

主　编／彭曦　副主编／何宝年　刘峰

華東理工大學出版社

非外借

日语教学与日本研究

——中国日语教学研究会江苏分会 2017—2018 年合刊

主　编　彭　曦
副主编　何宝年　刘　峰

華東理工大學出版社
EAST CHINA UNIVERSITY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY PRESS
·上海·

图书在版编目(CIP)数据

日语教学与日本研究：中国日语教学研究会江苏分会 2017—2018 年合刊 / 彭曦主编. —上海：华东理工大学出版社，2018.10

ISBN 978-7-5628-5598-9

Ⅰ.①日… Ⅱ.①彭… Ⅲ.①日语-教学研究-文集 ②日本-研究-文集 Ⅳ.①H369-53 ②K313.07-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2018)第 222670 号

项目统筹 / 朴美玲
责任编辑 / 朴美玲　周璐蓉
装帧设计 / 戚亮轩
出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司
地址：上海市梅陇路 130 号，200237
电话：021-64250306
网址：www.ecustpress.cn
邮箱：zongbianban@ecustpress.cn
印　　刷 / 江苏凤凰数码印务有限公司
开　　本 / 890mm×1240mm　1/32
印　　张 / 6.75
字　　数 / 199 千字
版　　次 / 2018 年 10 月第 1 版
印　　次 / 2018 年 10 月第 1 次
定　　价 / 78.00 元

版权所有　侵权必究

目　录

・特别演讲・

没後 100 年の夏目漱石 …… 細谷博(2)
文法教育と日本語教育 …… 坂本正(10)

・文学・

私論・『新古今和歌集』の表現技巧を読み解く …… 八幡啓(26)
目取真俊「水滴」の空間論 …… 楊洪俊(39)

・语言、教学・

外来要素による語根創成の類型的研究 …… 王健宜(52)
试论初级日语听力教学中的词汇教学 …… 李　斌(67)
中国人学習者における授受表現の誤用について
…… 田　静　施　晖(76)
話者交替におけるあいづちの機能
—日中対照分析を通して— …… 熊紅芝(91)
学術論文における因果関係を表す接続表現
「ため(に)」の使用実態 …… 周　瓴(106)
关于日语教师动机策略使用特征的定性研究
…… 朱　敏　张　勇(119)

·文化·

只做畅销书——幻冬舍创始人见城彻的编辑出版理念
…… 汪丽影(132)
日本兼六园的语言景观调查及分析 …… 吴丽霞　董娟娟(141)
京都学派与广松涉的“超越近代”论 …… 彭　曦(152)

·研究生论坛·

室町時代の茶の湯における「和漢融合」の発生
—村田珠光を中心に— …… 劉　翠(168)
「外的関係」連体修飾節における「という」の介入情況
—寺村秀夫による「感覚の名詞—姿」を中心に—
…… 張童心(179)
生态语言学视角下的日语惯用句误用研究 …… 李维佳(195)

·动态信息·

第五届“卡西欧杯”配音比赛 …… (206)
2017年会暨日本语言文化研讨会 …… (206)
江苏省首届日语专业大学生才艺大赛决赛 …… (207)
第六届“卡西欧·新世界杯”江苏省高校日语配音大赛 …… (208)
第三届“舜禹杯”日语翻译(笔译)竞赛 …… (209)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

·特别演讲·

没後100年の夏目漱石*

細谷博

夏目漱石は1867年(慶応3年)2月9日(旧暦1月5日)に生まれ、1916年(大正5年)12月9日に満49歳で没しました。従って、今年2016年はちょうど漱石没後百年に当たるわけです。この機会に、再び漱石の作家としてのあり方とその作品の意味を考えることは、近代・現代を生きる我々自身のあり方をも考えることになると思います。

夏目漱石は、1867年、すなわち明治維新の前年の生まれのため、満年齢が明治と同年となります。つまり、漱石は明治と同じ年の作家なのです。また、その生涯には三つの大きな終りと始まりとがありました。それは、次の三つです。

(1) 江戸の終りと明治の始まり　1868年(漱石1歳)
(2) 19世紀の終りと20世紀の始まり　1901年(漱石34歳)
　——英国留学中。同時にビクトリア女王没によりVictorian eraも終る。
(3) 明治の終りと大正の始まり　1912年(漱石45歳)

まさに、漱石は身をもって明治を生き、明治の最後を見とどけて去った人なのだといえるでしょう。

---

* 编者注:此文为南山大学文学部教授细谷博2016年11月12日在南京林业大学举行的"中国日语教学研究会江苏分会2016年会暨日本语言文化研讨会"上的主旨发言稿。

明治の45年間には、日清戦争①(1894—1895年)と日露戦争(1904—1905年)があり、さらに大正に入って、『こころ』を朝日新聞に連載中の1914年7月28日に第一次世界大戦が勃発しました。これは、『こころ』連載中には終らず、4年後の1918年まで続き、近代初の総力戦としてヨーロッパに大きな被害と衝撃とを与えました。その第一次世界大戦の戦時下に漱石は胃病が悪化して死んだわけです。漱石の亡くなった翌年には、ロシア革命が起こりました。

漱石の作家としての出発は、1905年(明治38年)の『吾輩は猫である』や『倫敦塔』に見ることができます。その後、1906年の『坊っちゃん』と『草枕』を経て、1907年(明治40年)には、漱石は第一高等学校と帝国大学(東大)の教員を辞して、朝日新聞の社員、つまり専属の作家となりました。

すなわち、この1907年(明治40年)から1916年(大正5年)までの満10年間が、漱石のプロの作家であった期間であり、その間に漱石は10本の長編小説を書いたのです。10年間に10本、これも漱石の履歴の分かりやすい点ですが、それはいかにも短く慌ただしい期間であり、ぶり返す精神の不安定と病苦とに苦しめられた辛い時期でもあったのです。

漱石の作品は20世紀に書かれたものであり、また、平岡敏夫氏が指摘しているように、日露戦争後の文学であるともいえます。ここではまず、その10本の長編中最も多くの読者を持っている『こころ』について考えてみましょう。

『こころ』(1914年)という小説は、「私」という人間の一人称の語りによってできており(「上」「中」と「下」では異なる「私」が語り手となります)、その語り手による回顧によってある人物(先生)の姿があらわれてくるという構造です。こんな説明をすると何やら難しそうに聞こえますが、読んでみれば、文章は平明で分かりやすく、しかも「先生」という人が謎めいて見え、興味をかきたてられます。漱石は、『吾輩は猫である』の中でも「探偵」が嫌いだと述べ

① 编者注:中国称之为“甲午战争”。

ているのですが、実際には、人の心を理解しようとして推理し、読者を引き付けようとして探偵小説仕立ての書き方もしているわけです。

さて、そんな『こころ』の中でさらに気になる言葉があります。それは「明治の精神」という言葉です。『こころ』の本文を読んでみましょう。

> すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御(ほうぎょ)になりました。そのとき私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終ったような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後に生き残っているのは必竟(ひっきょう)時勢遅れだという感じが烈しく私の胸を打ちました。私は明白(あから)さまに妻にそういいました。妻は笑って取り合いませんでしたが、何を思ったものか、突然私に、では殉死(じゅんし)でもしたらよかろうと調戯(からか)いました。(下五十六)

こうして唐突にあらわれた「明治の精神」という語には、一言では言えないさまざまなものが含まれていると思われます。それをあえて、やや乱暴に整理して考えてみたいと思います。

そこには、まず江戸期から続いて生きてきた人々の心に保たれているはずの伝統的な精神のありかた、いわば「旧道徳」というべきものがあるでしょう。しかし、明治維新によって、日本は変わらざるをえなかったわけです。社会のシステムから日常生活まで、さらには、心のあり方までが西洋文明の大きな影響を受けました。そこで得られたものが、近代的な西洋の思想であり、特に個人主義というものだったのだと考えることができます。すなわち、明治を生きた人々の中で、特に知識人たちの心のありかたにおいては、「旧道徳」と「近代思想」や「個人主義」がせめぎあっていたのだと見ることができるでしょう。

つまり、『こころ』の「先生」という明治を身をもって生きたと感

じている人の裡にある「明治の精神」とは、それまでの日本の精神と西洋の精神とのせめぎあい、葛藤によって培われてきたものであるということができると思います。

> 「自由と独立と己れとに充(み)ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」(上十五)

『こころ』の先生は、若い「私」に向かってこんな言葉を発します。大変印象的な言葉です。

それは、新しい西洋の近代思想によって得た「自由」や「独立」や「己れ」というすばらしいものが、同時にまた我々を苦しめるものともなっているのだ、という感じ方をあらわしています。その奥には、漱石自身の、近代の日本に対する考え方が見て取れるでしょう。

漱石は、その講演「現代日本の開化」(1911年)に於いて、「西洋の開化」は「内発的」で、「花が開くようにおのずから蕾(つぼみ)が破れて花弁が外に向う」ものであるのに対して、「現代日本の開化」はあくまで西洋の急激な影響による「外発的」なもので、「外からおっかぶさった他の力でやむをえず一種の形式を取る」のだと述べています。

> 我々の開化の一部分、あるいは大部分はいくら己惚(うぬぼ)れてみても上滑(うわすべ)りと評するより致し方がない。しかしそれが悪いからお止(よ)しなさいと云うのではない。事実やむをえない、涙を呑んで上滑りに滑って行かなければならないと云うのです。(「現代日本の開化」)

ここには漱石のペシミズム(悲観主義)が滲んでいます。それは、決して楽観的でない、暗く、重い言葉です。しかし、なおか

つ、それには深い共感を与えるようなものがあり、共にこの「近代」という時代を生きているのだ、という手ごたえや魅力も感じられる言葉とも見えるのです。

『こころ』の一つ前の作品『行人』(1913年)にはこんな不安な心理も語られています。

> ただ不安なのです。したがってじっとしていられないのです。兄さんは落ちついて寝ていられないから起きると云います。起きると、ただ起きていられないから歩くと云います。歩くとただ歩いていられないから走(か)けると云います。すでに走け出した以上、どこまで行っても止まれないと云います。止まれないばかりなら好いが刻一刻と速力を増して行かなければならないと云います。その極端を想像すると恐ろしいと云います。冷汗が出るように恐ろしいと云います。怖くて怖くてたまらないと云います。(塵労三十一)

さらに、この「兄さん」=一郎は、「死ぬか、気が違うか、それでなければ宗教に入るか。僕の前途にはこの三つのものしかない」と語ります。それは、柄谷行人氏等が指摘したように、「死」は『こころ』の先生の自殺へ、「狂気」は『行人』の一郎の状態へ、そして、「宗教」は『門』の宗助の参禅へ、と各々を作中の人物の動きへとつなげて考えることもできるでしょう。

こうした漱石の言葉を読んでくると、ひところ考えられていた「文豪漱石」というイメージから、「暗い漱石」というイメージが、この間の第二次世界大戦を挟んであらわれてきたことにも納得がいくと思います。いわば、漱石山脈と呼ばれた漱石の弟子達がもたらした「文豪漱石」に対して、川端康成ら昭和作家達は反発しました。さらに、中野重治はその作中で「漱石って奴は暗い奴だったんだ。」(「小説の描け小説家」(1936年1月))と述べ、矢崎弾や中村光夫、そして戦後世代の批評家江藤淳は「暗い漱石」を追求しまし

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

た。そこには、まさに漱石像の変遷があります。

> 漱石という人はおそろしく孤独な人間だったが、漱石の作品は不思議と読者を孤独にしない。これはどういうことだろうかと、私はこのごろ思うようになった。(江藤淳「現代と漱石と私」冒頭)

こうした「暗い漱石」の像、その深く、不安な、しかも同時にどこかふかぶかとして、ため息の漏れるような懐かしいイメージに、私も強く引かれてきました。

その上で、しかし今、私はさらに漱石作品の読解の可能性をひろげ、価値を深めるようなあらたなイメージとして「滑稽な漱石」に注目したいと思っています。それは、「文豪漱石」から「暗い漱石」を経た後で見出されるべきものとしての、「滑稽で身近な漱石」であり、かつまた「痛切な隣人漱石」というイメージです。

1914年に47歳で『こころ』を書いた漱石は、翌1915年には48歳で『こころ』とは全く異なる『道草』を書きました。それは、いわば約10年前の『吾輩は猫である』を書くに至った頃の自分を書いた自伝的小説といわれるものです。そこでは、漱石自身に当たる主人公健三だけでなく、その妻のお住もいきいきとした人間として如実に描かれています。そして、つづく死の年、満49歳の漱石が書こうとしていたのが『明暗』です。私はこの最後の二作品『道草』と『明暗』とが、漱石文学の最重要な小説ではないかと考えているのです。

『明暗』は、新聞小説作家·漱石の最後の長編であり、技巧的にも題材的にも、いかにも英国文学のよき読者であった漱石らしい、ユーモアと皮肉に満ちたすぐれた人間観察による小説らしい小説だといえます。その身近な人間関係の細部にまでわたる描写がリアリティをもたらし、どこにでも居るような典型的ともいえる人物が、各々対称的(シンメトリカル)に配置され、日々の言動が辛辣な語りによって炙り出され、読み手の笑いを誘っていま

す。その〈凡常の人間〉達の駆け引きや愚行の中から、我々自身の〈生〉の切実な動きとかたちが見えてくるのです。

私は、従来、漱石の遺作として、ともすれば重く読まれてきた『明暗』を、あらたな読み取りによって解放し、何よりよくできた面白い小説として、〈人間喜劇〉造形の力技を見せてくれるものとして意味づけたいと思っています。それは同時に、我々自身の〈読み〉の力、すなわち人間理解の力を試されることにもなるのだ、と考えます。

そこには、初期の『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』の明るく、また苦みも含んだ滑稽に通じるものもあります。

三十八、九歳のときの『猫』や『坊っちゃん』で「近代日本人の典型像」(伊藤整)の描出を果たした漱石は、さらに10年後に『道草』を書いて、『猫』や『坊っちゃん』執筆時の自分と妻を徹底して対象化しました。そして、最後の『明暗』で、みごとに凡常の人間典型の描出と滑稽かつ切実な人間理解の可能性を示したのだ、と私は考えます。

このように初期作品の『猫』や『坊っちゃん』と最後の『道草』と『明暗』をつなげて読むことは、作家漱石の奥行きと、漱石文学の可能性とを同時にひろげることになるのではないかと思います。

東洋の片隅に生きる我々は、大きな世界と時代のうねりの中で、依然として「上滑りの開化」を「涙を呑んで上滑りに滑って行かなければならない」のだという苦い思いとともに、しかしそうした時代の現実自体を、文学という言葉の表現によって、あらためて深い共感とともに受けとめなおすことができるのです。すなわち、「滑稽で身近な漱石」と「痛切な隣人漱石」との二つの像を同時に読み取ろうとすることは、我々自身の精神にも、ある奥行きとひろがりとを見出すことへとつながるのではないかと考えているのです。

作者简介

姓名：細谷博（ほそや ひろし）

职称：名誉教授

工作单位：南山大学

研究方向：日本文学

文法教育と日本語教育*

坂本正

1　これまでの文法教育

この講演では日本語教育における従来の文法教育について振り返ってみたい。言語学や日本語学の文法がそのまま教えられる場合もあると思われるが、日本語教育に従事する多くの教師は、学習者が日本語の文法を身に付けやすいように、工夫し、噛み砕いて、学習者が十分理解、咀嚼できるような文法教育を行っている。

1.1　文法＝文型の集合

日本語教育における文法教育とは、文型教育と言ってもよいであろう。日本語教育における文型とは、英語教育のようなSV(主語＋動詞,例:Taro came.)、SVC(主語＋動詞＋補語,例:She is a student.)、SVO(主語＋動詞＋直接目的語,例:I played the piano.)、SVOO(主語＋動詞＋間接目的語＋直接目的語,例:I gave her some flowers.)、SVOC(主語＋動詞＋直接目的語＋補語,例:He called me Tom.)などの5文型と言われるものとは違って、より具体的に文の型を示したものである。例えば、初級の日本語の教科書を見てみると、文型として、「～は～だ」「～に～がある/いる」「～は～を～(動作動詞)」「～は～が～(形容詞、状態動詞)」

---

* 编者注:此文为南山大学名誉教授、名古屋外国语大学教授坂本正2016年11月12日在南京林业大学举行的"中国日语教学研究会江苏分会2016年会暨日本语言文化研讨会"上的主旨发言稿。

「～は～が～(動詞語幹)たい」「～は～に～を～(動詞テ形)あげる」「～は～に～を～(動詞テ形)もらう」など、より具体的に文の骨組みがわかるようになっている。

これまでの日本語教育で文法教育と言った場合、この文型を一つ一つ、導入し、その意味を解説する、つまり、初級レベルなら初級レベルで教えられる文型の集まり、集合を、時間をかけて、一つ一つ導入し、解説することが文法教育であると思われていたように思う。学習者の日本語のレベルが上がるにつれて、似たような文型が導入されるので、ある時点で類似した文型の異同をわかりやすく解説するのも文法教育に含まれる。

1.2 文型導入

この節では、より詳しく文法導入時の一般的な流れについて説明しよう。一般的に、「文型の形」→「接続の形」→「文型の意味」→「コミュニケーション上の機能」という流れで教えていることが多いのではないだろうか。

(1) 文型の形

ここでは、例として「～ている」を取り上げてみよう。日本語教育では、「(～は)～動詞のテ形＋いる」という型で教えられることが多い。

(2) 接続の形

「いる」の前に来るのは、動詞のテ形と言われる形である。不規則動詞の「する」「来(く)る」はそれぞれ「して」「来(き)て」になるが、これは不規則なので、このまま学習者には覚えてもらう。一段動詞(Ru-Verb)と五段動詞(U-Verb)で、それぞれ規則が異なる。一段動詞(Ru-Verb)は動詞の最後の「る」を「て」に変えるだけでいい。

「食べる」「開ける」「変える」→「食べて」「開けて」「変えて」

しかし、五段動詞は、

動詞の最後が「う、つ、る」の場合は「って」

例:「買う」「待つ」「帰る」→「買って」「待って」「帰って」

動詞の最後が「む、ぶ、ぬ」の場合は「んで」

例:「読む」「呼ぶ」「死ぬ」→「読んで」「呼んで」「死んで」

動詞の最後が「す」の場合は「して」

例:「話す」「貸す」「押す」→「話して」「貸して」「押して」

動詞の最後が「く」の場合は「いて」

例:「書く」「泣く」「引く」→「書いて」「泣いて」「引いて」

動詞の最後が「ぐ」の場合は「いで」

例:「泳ぐ」「急ぐ」「漕ぐ」→「泳いで」「急いで」「漕いで」

というふうに、規則が多くて、複雑である。

ここで、もう一つの問題に遭遇する。それは一段動詞と五段動詞の区別である。「帰る」と「変える」は仮名で書くと、どちらも「かえる」で区別がつかない。漢字がわかる学習者は意味の違いから動詞の種類の区別ができるであろうが、そうでなければ区別をすることが難しい。ローマ字が使える場合は、以下のような方法がある。

「帰る」kaeru　　「変える」kaeru

kaerimasu　　kaemasu

辞書に出ている形(辞書形)と「～ます」の形をローマ字にして、上下に並べる。最初から見ていき、ローマ字の共通部分がどこで終わるかを見る。「帰る」の場合は、子音“r”で終わるが、「変える」の場合は、母音“e”で終わる。子音で終わる場合は五段動詞で、母音で終わる場合は一段動詞である。教科書によっては、五段動詞のことを子音動詞、一段動詞のことを母音動詞と呼ぶ場合がある。例外だと言って、教える場合も多いかと思うが、学習者が自分で動詞分類の確認ができる点ではぜひ教えておきたい区別の仕方である。

(3) 文型の意味

「～ている」という文型は、意味的にも用法が複数あって、難しい。一つの形式で一つの意味という場合がもっとも学びやすいが、この文型はそうはいかない。ちょっと考えても、動作の進行・継続、状態、結果状態、繰り返し・習慣など多くの意味・用法が考えられる。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com